

四国遍路における現代の「お接待」

—四国遍路巡拝記における「お接待」の諸相—

竹川郁雄（愛媛大学法文学部教授）

Modern-day osettai along the Shikoku Pilgrimage
—Various aspects of osettai in Shikoku pilgrimage books
Ikuo TAKEKAWA
Professor, Faculty of Laws and Letters, Ehime University

The act of giving osettai, such as money, to people along the Shikoku pilgrimage route and at the sacred sites is an act of expressing appreciation and even today (in the 21st century) is often carried out. In a paper questionnaire about osettai to pilgrims visiting Temple 50 Hantaji, it was discovered that an overwhelming large number of walking pilgrims received money as osettai. In fact, the rate was ten times more than those who traveled by car or in a group bus tour. This large difference shows that walking pilgrims have a lot more opportunity to receive osettai in various forms, with money being the most common, because those who walk meet local people on the route or at the sacred sites.

References in 185 pilgrimage books to people who received osettai along the Shikoku pilgrimage were examined and the findings are as follows: It is necessary to understand that both those making the Shikoku pilgrimage and those giving osettai are following the action of a formal custom. If there is a lack of understanding or if something making it difficult to live is observed, then there have been times when osettai was refused. The formal custom of giving osettai is based on the belief that the walking pilgrim is Kobo Daishi, something that elderly people still maintain today. There is also osettai for young people. It is believed that the custom of giving osettai becomes natural because they have seen and practiced it since they were young. As well, there are many cases when the osamefuda is not presented to the giver and because those who give osettai do not ask for it there are occasions when it becomes a voluntarily act where the intention is not expected in return.

はじめに

四国遍路における「お接待」は、札所や遍路沿道で遍路をする人たちに対して、金品を渡したりねぎらいの行為をすることであるが、現代（2000年代）もなお頻繁に行われている。それは全く面識のない人に金品を贈与するのであるから、普段の日常生活の行為とはかけ離れた現象である。

そのような「お接待」の種類について、前田卓はその人数や実施様態から、1. 個人接待、2. 霊場付近の村落民による接待、3. 接待講の三種類をあげている（前田1970:217-253）。個人接待については、遍路する人と「お接待」する人との対面的相互行為に今日の「お接待」の特徴が現れており、後に詳しく論ずることとする。霊場付近の村落民による接待は、現代においては老人会や地域の行事として行われるものが多く、地域の人々との交流や町おこしの意味を込めて行われている。接待講は四国の対岸の地域から団体に札所に来て「お接待」するもので、有田接待講、野上接待講、紀州接待講など伝統的に継続して行われてきた。地域の特産品や巡礼に役立つ品を船で運び、札所近くの接待所でお遍路さんに配るのである。これらの地域の行事や接待講は定期的に集団で行われるため、個人による工夫の余地や主体性は発揮されにくい。その点個人接待は、その人自身の思いが込められた「お接待」となり、その時の遍路者との出会いに応じてさまざまな形をとって行われる。

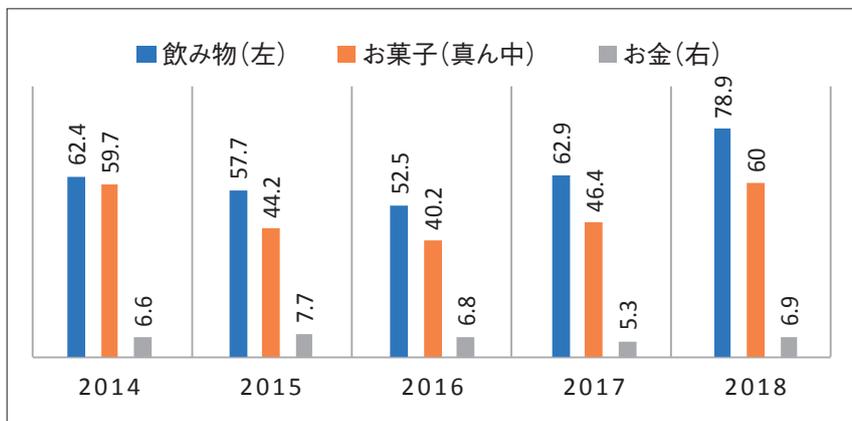
本稿では、特に個人で行われる「お接待」に注目し、四国の札所や遍路道沿道でどのように行われているのかを明らかにしようとする。そのために、遍路する人に対して質問紙調査を行ってどのような「お接待」を受けているのかを調べ、さらに最近の四国遍路巡拝記（1980年以降に出版された185冊）における「お接待」事例を取り上げて、「お接待」として行われる対面的相互行為のさまざまな諸相を考察する。その際、「お接待」には激励の言葉やちょっとした道案内も含まれるが、それらは挨拶や日常のやり取りと区別がつかない場合が多いので、「お接待」であることがはっきりわかり、その特徴をはっきりと示すお金の「お接待」のケースを中心に論ずることとする。

1 現代の「お接待」について

ここでの「お接待」を、四国遍路をする者に対して、慣習的に続いている儀礼的習俗に則って、無償あるいは便宜を図って自発的に物品・金銭・行為（労力）・宿泊等を提供する行動と規定し、考察を進める。

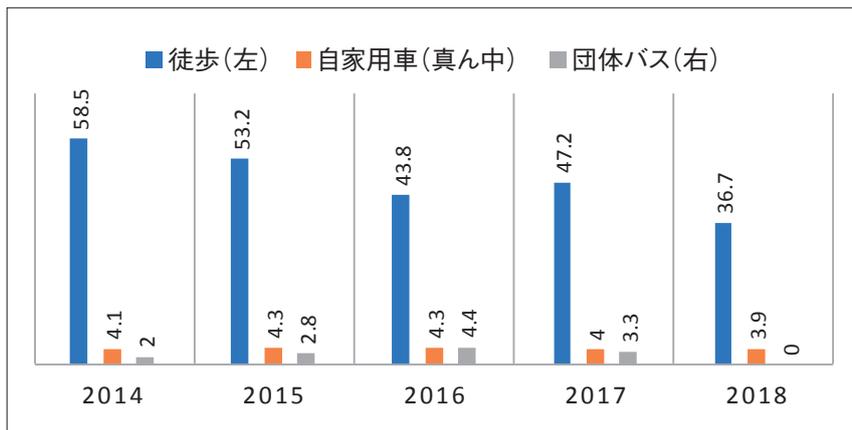
最初に「お接待」の現況について見ておきたい。第50番札所繁多寺において、遍路する人に対して、「お接待」のことを尋ねた質問を含む調査を、2014年から2018年まで毎年9月に実施した。回答者は総数4994人で、「お接待」を受けたことがあるかどうかについて尋ねた結果を以下に示す。

図表1 「お接待」を受けた比率



図表1は、遍路する人の中でどれくらいの人が「お接待」を受けているのかを、「飲み物」「お菓子」「お金」について、受けた比率を年度ごとに示したものである。飲み物とお菓子は多くの人が「お接待」を受けたと回答しているが、お金の回答比率は低くなっている。お金というのは、物とは異なり同情からの施しや社会的不正である贈収賄に通ずる感覚があるために、「お接待」の対象とはなりにくいのであろう。

図表2 交通手段別お金の「お接待」比率



図表2は交通手段別に見たお金の「お接待」比率である。お金の「お接待」を受けているのは徒歩が圧倒的に多く、自家用車や団体バスとの差は10倍程度になっている。ただ、徒歩においても、この5年間の比率を見ると少しずつお金の「お接待」を受ける割合が減っている。そうではあるが、これだけの差は、徒歩の人が札所や遍路道沿道で地域の人と出会って、お金を含むさまざまな「お接待」を受ける機会の多いことを示している。

お金の「お接待」の金額について、5回の調査において226名が具体的に金額を記入しており、それらの平均額は1287.2円、最も多い額は、1000円で91名、次は500円で52名となっていて、合わせて「お接待」金額回答者の半数を占め、500円と1000円がお金の「お接待」の標準となっているようである。最高額は20000円で1名、10000円は8名、5000円は8名であった。お金の「お接待」を受ける人は多いとは言えないが、毎年回答者の6%前後の人が受けている。

2 四国遍路巡拝記より見た「お接待」の諸相

(1) はじめて「お接待」を受けた時

四国遍路巡拝記では、それぞれの人が受けた「お接待」の様子がさまざまな形で記述されている。はじめて「お接待」を受けた時、それは全く日常の常識とは異なるので、異次元の世界に来たような思いを持つことを多くの人が書いている。次はそのような記述である。

(引用1.) 四人揃って今治市内を歩いていると、我々と同年代らしいおばさんに呼び止められた。「その病院に主人が入院しているんですが、あと3つ残して入院したので残念がっています。どうかこれを納めてください」と、一人一人に300円ずつ差し出した。一瞬、私は受けとっていいものかどうか迷った。他の3人は黙って頭を下げて受けとったので私も頭を下げて有難くいただいた。こんなこともあるんだな。四国という所は、不思議な所だと思う。安田さんではないが、遍路姿であれば皆んな良い人なのだ。改めて私は、遍路とは何であるかを考えさせられた。
(後藤大 2000:140,1)

はじめてお金の「お接待」に直面して、他の3人が素直に受け取っていたのでそれに従ったが、内心驚きを隠せず「四国という所は、不思議な所だ」と書いている。そして「遍路姿であれば皆んな良い人なのだ」と遍路姿をしていることが、この「お接待」を招いていることを記している。

四国遍路が「ゆるい巡礼」であることを森正人は指摘している(森正人 2014:10-12)。すなわち1. 出発はどこからでも、2. 大衆化され誰でも、3. 季節に関係なく随時いつでも、4. ステータスの差がなく平等に、5. 個人でも集団でも、6. どこで中断しまいたいつ再開してもよい。さらに、7. 自家用車、徒歩、バス、鉄道利用など交通手段は自由、8. 白衣や菅笠でなくてもよく服装は自由、ということである。従って、納経帳に墨書朱印が記帳されていくのを楽しむスタンプラリー遍路のように、遍路の知識がない人も、マス・メディア等の情報に触発されて、気軽に遍路する人も多く現れる。そのため、四国遍路の「お接待」について十分理解せずに遍路する人と「お接待」しようとする人との間で、さまざまな認識の違いや「お接待」を受け入れることへの葛藤が生じることとなる。

(2) 遍路者から見た「お接待」の特徴

遍路者から見た「お接待」の特徴について、四国遍路巡拝記から見てみる。

1. 予想外の出来事

(引用2.) 徳島市街地を歩いていた時、30代くらいの外国人女性から「どうぞ」と言われて飲物の自販機近くで100円玉を差し出された。全く予想もしなかったタイミングでの出来事で、受け取ったものの、どう返事していいのか、一瞬戸惑い、「ありがとうございます」とだけ言うのが精一杯であった。彼女もさっさと立ち去ったので、お礼の「納札」を渡しそくなってしまった。
(清益実 2007:31,2)

外国人女性から100円玉をどうぞと差し出されるという予想外の「お接待」である。納め札を「お接待」に対して渡そうという返礼作法は心得ていたのだが、あまりに突然で、そして見返りのものは全く期待していなかったのかさっさと立ち去ったので、納め札を渡しそこなっている。この外国人女性は「お接待」の儀礼的習俗を知っていて、遍路者がいたので実行したようである。

2. 見知らぬ人から

(引用3.) (遍路当時20代、土佐市内の公園で野宿をしていると) 暗闇の中から突然1人のおじいさんが私のところへやってきて1万円札を差し出して言う。「私も若くて元気だったら、君のように四国を歩きたい。どうか頑張ってください。」おじいさんはそう言って、公園の向こうの暗い路地へ消えていった。…自分には多くの人の夢が託されている。これはもはや私1人の旅ではない。助けてくれた皆のためになんとしても最後まで歩き通したい。私はこの事件があってからそう考えるようになった。
(松坂義晃 1997:237,8)

野宿していると突然おじいさんがやってきて、「頑張ってください」と1万円札を差し出し一言言った後す

ぐに去って行くという、常識ではなかなかあり得ない出来事である。高額の「お接待」をしているにもかかわらず、何の見返りも期待せず励ましの言葉だけかけて去っている。「お接待」を受けた遍路者は「自分には多くの人の夢が託されている。これはもはや私1人の旅ではない。助けてくれた皆のためになんとしても最後まで歩き通したい。」と、四国遍路結願への責任意識を自覚している。

3. 見返りを求めない

(引用4.) この内子町は柿の生産地である。…道路端に時々無人販売の柿がある。1袋200円ぐらいである。買おうと思って手を伸ばしたら、上の家から声がかかった。「お接待しますから、おいでなさい」と。喜んでゆくと、農婦の方が採り立ての山程の柿の中から、完熟の真っ赤な柿をどつと持ってきて、包丁も渡される。甘い柿がどんどん喉を通る。お腹いっぱいになり、お礼を言うと、持てるだけ持ってゆきなさいと、ビニール袋まで下さる。持ってゆきたいのは山々なれど、荷物になると遠慮する。博さんは折角だからと、10個ばかり背負い込む。お礼状を出さねばと、住所と名前をメモして、厚くお礼を申して出発する。博さんが再びその無人販売所前を通る時、金銭入れに1000円札を入れて歩き出したのである。

なにほど歩いた頃だったろうか、後から自転車のご婦人が私たちの前に止まり、「遍路さん、これは困ります。そうされるのではないかと見にゆきましたら、1000円札が入っているので、遍路さんに違いないと追って来たのです。これは戴けません」と強引に返されたのである。四国ではお接待は素直に頂くことがルールと知ってはいたが、つついこちらも感謝の気持を表したいのが人情である。人は本来善であることをつくづく実感する。

(向井安雄 2000:111)

四国遍路では、「お接待」のお返しに納め札を渡すということが慣習になっているが、このケースでは納め札でなく現金で返礼しようとしている。しかし、これはいただけませんと強引に返されている。他の引用ケースでもよくあるように、接待者は何も求めずすぐに去って行き、納め札を渡すことを気につけないことが多い。むしろ「お接待」への返礼に納め札を渡すことは、返礼としてふさわしくないのではないかという思いを持つ人がいる。次はそのような記述である。

(引用5.) 親切な振る舞いに、思わず納め札を渡そうとすると、「いらんそんなもん」と真っ当な反応で、うれしくなくなった。私も、お遍路がお接待されたときに手渡すべらべらな紙のお札には最初から気恥ずかしい思いがしていたのだ。

(宮田珠己 2011:84)

慣習から納め札を渡そうとして、断られた経験である。本人も「お接待」の返礼にべらべらな納め札では気恥ずかしさを感じていたのであろう、断るのは真っ当な反応だと書いている。このように、慣習通りでないやり取りも多く見られる。

前田卓によると、納め札を集めて俵にまとめて玄関に吊すと魔よけや盗難よけになると信じられて、納め札はご利益になるため、ギブアンドテイクの関係をもつと指摘しているが(前田 1970:223)、最近のケースでは、そのような意図で納め札をもらう人は少なくなっている。

4. 謙虚な言葉かけ

(引用6.) 「おへんろさん、おへんろさん、お接待させて下さい」……してあげるではなく、『させて下さい』と呼び止める四国の人々のお接待文化には、誰もものすごいカルチャーショックを受ける。かつてこの文化はぼくが暮らす伊勢路、お伊勢さん(伊勢神宮)への参宮街道にもあった。路銀の工面がつかない最下層の人々は杓(ヒシヤク)一本もってお伊勢参りに旅立った。行く先々で杓を差し出し奉謝を求め、時には小銭、時には食料を沿道の住民にいただき、それで命をつないで旅を続けたのである。ウォーキングのイベント以外に『歩き参宮』が途絶えてしまったと言って過言ではない現在、伊勢路からこの『喜捨』の精神文化はほとんど消えてしまった。

昨今、三重県でも観光振興の視点から『おもてなし』がかしましい。盛んにもてはやされてもいる。ぼくは上質の接客作法としての『おもてなし』を決して否定するものではないが、四国の人々の『お接待』とは似て非なるものである。『喜捨』の文化がこれほど広汎に、当たり前のこととして市井の普通の人々の間に息づいている世

界は、この国ではもう四国にしか残っていないのではないか。

(西田久光 2012:234, 5)

伊勢参りではかつてあった「喜捨」の文化がほとんど消えてしまい、四国にしか残っていないのではないかと書いている。「お接待」という慣習化した儀礼的習俗が、現代の四国にはなお存在していることを示している。

5. 自然な行為

(引用7.) コーヒーをくださったおじさんには「恩恵をほどこす」といったぎょうぎょうしい素振りはなかった。コーヒーがある。のどが渴いた人がいる。ごく自然に差し出す。それだけだ。土地の人たちはきっと、遍路びとにお接待をしていた父祖の姿を見て育ったのだろう。自分のものを人のためにさりげなく差し出す気風が、伝統として受け継がれてきたのだろう。受け継がれたものがいま、遍路の文化になっている。

(辰野和男 2001:116, 7)

恩恵を施すといった振る舞いはなく、ごく自然に「お接待」のコーヒーを差し出しており、それが親や祖父母の姿を見て受け継がれてきたのだろうと書いている。

以上の5点が遍路する者の視点から見た「お接待」の特徴である。現代においても遍路道沿道の場面でそうした特徴を含む「お接待」がさまざまな形で行われている。これらをあわせると、遍路者にとっての「お接待」とは、札所や遍路沿道で、見知らぬ人から見返りを求めず、謙虚な言葉かけとさりげない動作によって、金品が提供される予想外の行為である。このように四国遍路の「お接待」は、いったん日常的常識の枠組みを外して、慣習化した儀礼的習俗に基づいて行為する現象である。

(3) 「お接待」を断ったケース

「お接待」は断ってはいけないという慣習を持っているがそのことを知らずに、あるいはその時の状況から「お接待」を断わる場合がある。

(引用8.) 僕が2巡目で愛媛を歩いているときのことだった。道順を尋ねたら、10分ぐらい一緒に歩いておしゃべりしながら道案内をしてくださったおばあさんがいた。「変わったお遍路さんもおるなあ。この間は、男のお遍路さんにお賽銭をあげようとしたらな、「金ならたくさんあるから要らん」といわれた」。(串間洋 2003:186)

「金ならたくさんあるからいらん」と自分の今の境遇から断っている。「お接待」は断ってはいけないという慣習からするとしてはいけない行為ということになるが、それを知らないのであろう、「お接待」は成立しなかった。「お接待」の成立には、遍路者が「お接待」の儀礼的習俗を十分認識していることが必要となる。次は、認識していなかったために、対面的相互行為の場面で「お接待」がスムーズにいかなかったケースである。

(引用9.) 小学校の校門前にしゃがみ、僕に手招きをする婆さん。近づくと、5円玉10枚をビニール袋に入れたものを、ぼくに渡そうとする。このとき、お婆さんの後ろには2人の婦人が立っていて、この様子を見ておられた。「すみませんお金は受け取れません」ぼくはとっさにこぼんだ。すると後ろにいた婦人の1人が「おへんろさん、それはだめです」と、ぼくに近寄ってくる。顔を赤らめて明らかに怒っている。婦人はこう言った。「お婆さん97歳。5円玉を集め、毎日おへんろさんにお接待をしている。仏さまのご縁がありますようにと祈りを込めた5円玉。お婆さんにとって5円玉はお金ではありません。生きていることのこころのよすがなのです。それを断るなんて、あなたみたいなおへんろさんは見たことがない。」とさんざん叱られた。

(あいちあきら 2016:156, 7)

おばあさんが「生きていることのこころのよすが」として「お接待」を差し出しているのに対して、現金は受け取れないと常識的な断りの返事をしたところ、婦人からそれはだめだと叱責された事例である。この

遍路者にとって、お金は「お接待」として受け取るものの想定外であったのであろう。一方おばあさんにとっては、「お接待」することが最重要な思いとなって、遍路者に喜捨することが生きがいとなっており、遍路者との認識のずれ違いが起こっている。おばあさんと近親の婦人は、「お接待」を断った遍路者に対し「お接待」の習俗に反する行為だと強く非難している。このように四国の年配者の間には、守るべき「お接待」の行為規範がしっかりと体得されており、遍路道沿道で実際に実行されている。

(引用10.) 足が悪いそのおばあさんは、日陰になった自宅の脇に敷物を敷いて横になり、お遍路さんを見つけるたびに呼び込んで、5円玉を10個入れた袋をお接待にくれたという。…お接待の5円玉を札所のお賽銭に使うという人や、高野山まで持って行くという人など、みんなそのお接待を重く感じていた。自分は幸か不幸かそんな重いお接待を受けずにきた。(木下徳生 2010:34,5)

これは前例と同じおばあさんの場合で、「お接待」を断ったケースではないが、5円玉を10個入れた袋の「お接待」を受けて、歩き遍路にとって物理的にも精神的にも負担に感じることを書いたものである。「お接待」はもらって常にうれしいというわけにはいかず、荷物を軽くしたい歩き遍路にとっては重荷になったり、感情移入されているだけに精神的に負担になったりして、素直に喜べない場合がある。

「お接待」を断ってはいけないというのが慣習となっているが、「お接待」の場面にもさまざまな事情がある。接待者の生活が苦しいのを察して、「お接待」は断ってはいけないという慣習を知っているにもかかわらず、申し出た「お接待」を遍路者が辞退することがある。次のような事例がその場合である。

(引用11.) 私は丸椅子から立ち上がってガラスケースから牛乳パックを取り出し、「いくら」と聞いた。婆さんはちょっと困った表情を見せて、「お接待……お接待しときます」と、か細く言って、こちらの顔をうらめしそうに見た。……千客万来とも思えぬこの店で100円の利益を出すのがどれほど大変か、迷う婆さんの所作とともに想像はできた。思えば四六時中どこかで接待を待ち望むようになっていた私も、さすがにこの接待には気が咎めた。「お湯を接待してもらったし、これは払わしてもらわんと、お大師さんに叱られる」。遍路となっはじめて品物の接待を断わってしまった。(加賀山耕一 2000:228,9)

ここでは、お婆さんは遍路者への「お接待」を自分にとっての義務的行為だとみなしていることがうかがえる。そのため生活の糧を得る商売事情は苦しいにもかかわらず、遍路姿をしている人に「お接待しときます」と言わざるをえなかったのである。遍路者への「お接待」をしなければいけないものと考えなければ、こうした葛藤は起こらず、接待される側も「お接待」なしで済ませることができたのであろう。

しかしお婆さんのお大師信仰からくる「お接待」すべしという意識が強かったために、「お接待しときます」と言ったのだが、遍路者は繁盛しているようには見えないお店の状態を考えて、断る決断をしたのである。「お接待」しますという申し出に対し、それは今ここの現状から見て、素直に受け入れるべきではないと感じさせる場合があり、遍路する人に「お接待」を受けることへの葛藤を生じさせている。

(4) 接待者の意識と行動

次に、「お接待」する側の意識と行動について見てみよう。

1. お大師さんにあげる

(引用12.) 近付いて来た70歳くらいの女性が「手を出して下さい」と言った。お接待で何か下さるのかなと思いつつ、私は右手を差し出した。彼女はその手の平に100円玉を3つ置く。「これは頂くわけには」反射的に私はそう言った。お接待を断ってはいけない、ということは私も知っていた。しかしそれは品物の場合であって、現金を受け取るという場面は考えていなかった。現金は受け取るべきではない、と思っていたからである。すると彼女は「あなたにじゃない。お大師さんに上げるんだから、そこらでうどんでも食べて」サッパリした口調でそう言った。周りには買い物に来た女性客が何人かいる。それとなく私達のやり取りを聞いている。「有り難く頂戴致します」そう言って、右手の平を少し挙げ、会釈した。彼女はその場を離れて行った。(狭間秀夫 2016:139,40)

「あんにゃない。お大師さんに上げるんだから、そこらでうどんでも食べて」とは、あなた個人に対して「お接待」しているのではなく、お大師さんという「今も四国を巡拝している救世主」に対してしているのである。しかし、同時に実際に目の前にいる一人の男性に対して100円玉を3つ差し出しているのであり、生身の人間であることもわかっていて、「そこらでうどんでも食べて」と言っている。明らかに混乱した話であるが、当人は何ら違和感を感じていない。今前にいる「お遍路さん」を「お大師さん」と見立てて「お接待」するのは、現実的に無理があるにもかかわらず、本人が望む喜捨行為として実行されている。

(引用13.) おじいちゃんが、ママチャリをこぎこぎ近づいてきた。そして、「あんな歩いてんのか?。ちょっと待ち!、お接待さして!」と言って、いきなり私の目の前に1000円札を1枚差し出した。…「いいです、いいです」断ると、「あんなやないの。お大師さんにあげるんじゃ!」と一喝された。なるほどこの理論には深く納得して、まだお経は覚えていないので、納め札を1枚もらっていただき、何度もお礼を言った。(三浦素子 2007:17)

歩いているお遍路さんを見つけて、千円札を渡そうとする。遍路者が、「いいです、いいです」と断ると、「あんなやないの。お大師さんにあげるんじゃ!」と一喝され、納得して受け取り納め札を渡している。お爺さんは歩き遍路を修行するお大師さんを見立て「お接待」し、遍路者は「お大師さんにあげるんじゃ」と言われたことに納得して、慣習に基づいて納め札を渡している。

遍路で歩いていると、地元の人から拝まれることがある。何度かそのようなことを経験していると、意識が変化していく。

(引用14.) 東京の多忙な業務のなかで、自分が他人に正面切って真顔で祈られる光景を予想できる者はいるのだろうか。彼の、一瞥は私の心の壁を一瞬にして破壊した。宗教嫌いの壁を。そして懐疑の壁を。彼の前では私は否応なく「お大師さま」であった。しかも、私は自分の行為を予測していなかっただけでなく、その行為に後悔も困惑もしていないのだ。むしろ、今まで見しらぬ人のお接待に照れていた自分を恥じた。このことがあってから、私はお接待に対し、その瞬間だけは「お大師さま」のかわりであるかの如くに、心から手を合わせるようになった。それが、お接待の心を受けとめる最善の方法と知ったのだ。(熊倉伸宏 2010:120)

遍路経験を重ねることによって、「お接待」し祈る人に対して、「お大師さま」のかわりであるかの如くに心から手を合わせる事が、「お接待」の心を受け止める最善の方法だと知ったことを書いている。「お接待」する者は、固有名の自分に対してではなく遍路者をお大師様と見立てて「お接待」していることに気づき、自分がお大師様として役割行為することが「お接待」する者の期待に応えることだと思えるようになっていく。

2. 感謝の気持ちと「お接待」の楽しさ

(引用15.) 1000円のお接待。「袋入りではなく、裸の1000円札というのがスゴイ!」「お接待てっね、私たちにもううれしいことなの。善根は功德になるし、お遍路さんが自分の代わりに参拝してくれているような気がするの。それに御先祖様の供養にもなるのよ。だからそんなに気にしないでください。私たちがの方がお礼を言いたいくらい。どうもありがとう。」(横山良一 2002:121)

「お接待」することは、功德になり、自分の代わりに参拝してくれ、先祖の供養にもなると、接待者にとってもうれしいことで、お礼を言いたいのだと話している。

(引用16.) おばあさんがそばに立っているのに気づいた。彼女は「お遍路さん、お接待させて下さい。」と言って、私に硬貨を下さった。私はお礼を言った後よく見ると、500円玉であった。「おばあさん。これ100円ではなくて500円ですよ。間違いではありませんか。」「いいえ間違いではありません。私は74歳になりますが、ここ20年いいことばかりでした。感謝の気持ちを表したいのですよ。しかし最近「歩き遍路」に会えなかったので今日はとてもうれしいのですよ。実はいつもの道を自転車で走っていると今日はこちらの道に進めと指令があったのです。その通り進んで来たら「お遍路さん」に会えたんですよ。」(高見貞徳 1999:35)

ここ20年いいことばかりであったので、最近では会えなかった歩き遍路にやっと会えたので、感謝の気持ちを表したく、「お接待」したのだという。慣習化した儀礼的習俗としての「お接待」行為を歩き遍路に対して行うことが、このおばあさんにとって自分の気持ちを示す重要な表現手段となっている。このように「お接待」をするということが自己満足の行為となって、生活の中での活力となっている。

3. 私の代わりにお参りしてください

(引用17.) 意識をしていたわけではないのですが、約300mぐらいのところに電動車椅子に乗ったおばあさんが、動かないで私の来るのを待っています。どうしたのかなあ…?車の調子でも悪いのか?そんなことを思いながら通り過ぎようとした時、お遍路さんお遍路さん、これを持って行きなさいが!!とって500円硬貨を差し出すではありませんか。おばあさん曰く、私は、足が悪くお参りが叶いません。私の代りと思ひ受けとって下さい。そしてお参りを続けて下さい。ということなので、ためらいながらも遠慮なく頂くことにしました。このようなハプニングも歩き遍路をしていると存在するのですね。
(五十崎洋一 2008:91)

足が悪くお参りできないので、私の代わりと思って受け取ってくださいと500円の「お接待」を受けている。このように代理参詣の気持ちを込めて、「お接待」する場合もある。

(5) 若い人や子どもの「お接待」

ここまでは「お接待」は年配の人が行うケースばかりであったが、若い人による「お接待」も四国遍路巡拝記ではしばしば見られる。次はそのようなケースである。

(引用18.) 宿へ引き返す道で、背後に軽トラックが止まったかと思うと、窓から若い男性の顔がのぞき、「お接待させてください」と200円を差し出してきた。地元で両親とコンビニエンスストアを営む25歳。
(横田賢一 2000:13,4)

(引用19.) 大きな乗用車が一台スピードを落として幅寄せするように私に近づいてきたときは、ちょっと身構えた。運転しているのはTシャツ姿の屈強な若者である。…「おじさん、歩いてお遍路かね?」「はい」「これ、お接待、取っておきな」と、若者が窓から手を突き出した。緊張感がいつべんに緩む。礼を言ってありがたく受け取ってみれば200円だ。車は速度を上げて走り去る。私は恥ずかしくなった。でも、仕方がないとも思った。世の中には厳しい現実があるのも事実だから。それにしても、遍路に出て悪い奴に1度も巡り合わないどころか、出会う人はみな心優しい人ばかりだということが不思議だ。
(大谷唱二 2004:225,6)

これら2つのケースは、20代ころの若者による「お接待」である。金額は200円で、これで遍路者の生活の糧にしてもらおうという意識はないであろう。「お接待」の伝統的な儀礼的習俗を幼少期から身につけてきて実行したものとみられる。次はさらに小さい子どもからの「お接待」である。

(引用20.) 南光坊を後にして、静かな家並みを歩いていると、小学生の男の子が追いかけて来て、「お茶でも買って下さい」と500円玉を差し出す。振り返ると自転車を止めてお母さんが見ている。きっとお母さんの財布から取り出し、子供に指示したのだろう。有為ちゃんが、「ちょっと待ってて」と納札を渡し、「有難うネ」と礼を言い、離れて立つお母さんに頭を下げる。この地の子供たちは、こうして育てられるのか。(鈴木昭一 2009:188,9)

(引用21.) 幼稚園児くらいの子供が近づいてきて手を出す。私も手を出すと、その子は私に200円渡してきた。私がびっくりして周りを見回すと、両親らしい若い夫婦がもう一人子供を連れてニコニコしていた。私は立ち上がり深く頭をさげ、「ありがとうございます」と礼を言った。日曜日のため、子供連れて公園に遊びに来た若い夫婦が、子供に手渡せと言ったらしい。子供からお接待を受けたのははじめてだし、とにかく驚いた。当然のことながら公園を出るときには、再度丁寧に礼を言い、出発した。
(空昌 2011:52,3)

これら2つのケースは、小学生や幼稚園児による「お接待」の実行で、背後で親が指図している。このように、「この地の子どもたちはこうして育てられるのか」と、幼少期から「お接待」を見たり実行したりすることで、「お接待」する習慣が自然と身についていくのだと考えられる。

3 現代の「お接待」の特徴

四国遍路巡拝記より、「お接待」にかかわる事例を見てきた。これらから、現代の「お接待」の特徴をあげると次のようである。

(1) 「お接待」の返礼に納め札をもらわない場合が多い

四国遍路巡拝記では、遍路者が「お接待」の作法を理解していて納め札を渡す場合もあるが、「お接待」する側が接待品を渡してすぐ立ち去るなど、納め札のことは関心事とならない場合が多い。バラバラの納め札などいらぬという場合もある(引用5)。納め札をもらうと、それがご利益を生むものだとか、集めて吊すと厄除けになるとかいったことは考慮されていないのであろう。その意味で「お接待」は従来の互酬性の部分がなくなり、一方的な贈与行為となっている。あるいは、四国遍路における贈与行為そのものが、楽しい自己完結的行為となっている(引用15)。四国遍路で「お接待」を受けたマリー＝エディット・ラヴァルは、それが無償の愛の力であり、「無私贈与の思想―人間性の根本的な潜在力」だと述べている(マリー＝エディット・ラヴァル 邦訳2016:202)。

(2) 「お接待」を断る場合がある

「お接待」は断ってはいけないというのが慣習であるが、断っている場合があった。それらの多くは、断ってはいけないという慣習を知らないことによるものである。このことは、何の制約もなく四国遍路への知識を持たずに遍路に出かけることができるという、四国遍路自体がゆるい巡礼であることによる。常識的には、「お接待する側は、自分より豊かな暮らしをしている人になぜお接待(金品の授受)をするのか、疑問に思うであろうし、お接待を受ける側は別にお金に不自由していないのに物乞いのようなまねはいやだと感じる人も多い」(藤沢 1997:143)だろうということで、「お接待」の成立には、儀礼的習俗に則った行為が行われているのだと双方が理解することが必要である。

(3) 「お接待」に対するさまざまな感情や意識

四国遍路巡拝記では、「お接待」されたことに対して、さまざまな感情や意識が示されている。それらははじめて経験した時の非日常感(引用1)、四国遍路結願への責任意識(引用3)、謙虚で自然な行為への賛美(引用6,7)、いただいた金品への負担感(引用10)、接待者の暮らしへの同情(引用11)、「お接待」を受け止める態度(引用14)などである。これらのことが実際に起こりうるがゆえに、常によい思い出となる場合ばかりではないが、パッケージ化された旅行では得られない醍醐味を経験することができ、何度も遍路しようという気になるのであろう。

(4) お大師信仰の伝承

村上護によると、「お大師さまというのは、もちろん弘法大師空海のことである。あるときは旅僧で、あるときは物乞いのへんどに身をやつして、いつ家の軒先に現われるかもしれない。四国にはそうした伝承がなお生きており、祖母などは深く信じるひとりでもあった。「もしもその人が、お大師さまじやったらおおごだよ。お遍路さんでもへんどでも誰でもええ、わけへだてなくお接待せにゃいけん」親は留守番の子にそういい聞かせ、野良仕事に出たものである。」(村上 1986:4,5)。歩き遍路に対して、その人をお大師様と見立てて「お接待」をする儀礼的習俗が、今日なお四国の人びとのあいだで保持されていることを示している。このことが、現代において四国に「お接待」を存続させている重要な要因であると考えられる。

おわりに

本稿では、「お接待」が多様な形で行われ自由裁量の余地があまりにも多いため、儀礼(ritual)とはせず儀礼的要素を含む習俗であるとみなしてきた。しかし「お接待」が成立するためには、儀礼的な部分が必要

である。ロイ・ラパポートは、儀礼を正典的メッセージと自己準拠的メッセージからなると考えた (Roy A. Rappaport, 1999:52-4)。正典的メッセージとは、正典 (canon) として存在し得る象徴的なメッセージであり、自己準拠的メッセージとは、その場の文脈から離れては存在し得ない「いま・ここ」をめぐるメッセージである。「お接待」を儀礼としてみた場合、正典的メッセージはお大師信仰であり、「信仰の対象が如来や菩薩とちがひ、弘法大師という人物がこの世にたしかに実在した、われわれと同じ人間であったという親近感から、遍路への施しが大師への供養・報謝と同義だという感覚」(山本和加子1995:160) である。自己準拠的メッセージは、その時の状況に応じて、「お接待」に関する各人各様の自発的行動を生み出す。

ゆるい巡礼である四国遍路であるがゆえに、遍路者の「お接待」に対する意識や反応はさまざまで、時には「お接待」が成立しなかったりする。しかし、なお「お接待」という慣習化した儀礼的習俗が人びとの間で継承され、祖父や親から子へ受け継がれていく限り、個人による「お接待」は四国で続いていくであろう。

引用文献

- あいちあきら 2016年 『へんろみち お四国遍路だより』 編集工房ノア
- 五十崎洋一 2008年 『団塊親父四国を歩く』 第一印刷株式会社
- 大谷唱二 2004年 『四国八十八ヶ所遍路 ふれあいの旅路』 文芸社
- 加賀山耕一 2000年 『さあ、巡礼だ 転機としての四国八十八ヶ所』 三五館
- 木下徳生 2010年 『四国お遍路まんだら』 尾張屋印刷所
- 清益実 2007年 『四国遍路記 四国の風に誘われて』 近代文藝社
- 串間洋 2003年 『四国遍路のはじめ方』 明日香出版社
- 熊倉伸宏 2010年 『あそび遍路 おとなの夏休み』 講談社
- 後藤大 2000年 『風の吹くままー四国遍路記ー』 文芸社
- 鈴木昭一 2009年 『風と歩いた夫婦の四国遍路』 ビレッジプレス
- 空昌 2011年 『わが歩き遍路 古希の日の結願を目指して』 文芸社
- 高見貞徳 1999年 『四国霊場巡り歩き遍路の世界』 文芸社
- 辰野和男 2001年 『四国遍路』 岩波書店
- 西田久光 2012年 『歩きへんろ夫婦旅ー身も心もダイエットてくてく1200キロ』 星雲社
- 狭間秀夫 2016年 『後期高齢者四国遍路を歩いてみれば』 風詠社
- 藤沢真理子 1997年 『風の祈りー四国遍路とボランティアズー』 創風社出版
- 前田卓 1970年 『巡礼の社会学』 関西大学・経済政治研究所
- 松坂義晃 1997年 『空海の残した道ー現代歩き遍路がそこに見たもの』 新風社
- マリー=エディット・ラヴァル (鈴木孝弥訳) 2015年 (邦訳2016年) 『フランスからお遍路に来ました。』 イースト・プレス
- 三浦素子 2007年 『すべるおへんろさん』 新風社
- 宮田珠己 2011年 『だいたい四国八十八ヶ所』 本の雑誌社
- 向井安雄 2000年 『四国八十八ヶ所ある記』 鳥影社
- 村上護 1986年 『遍路まんだら 空海と四国巡礼を歩く』 佼成出版社
- 森正人 2014年 『四国遍路』 中央公論新社
- 山本和加子 1995年 『四国遍路の民衆史』 新人物往来社
- 横田賢一 2000年 『四国霊場四季暦へんろみちきせつのかたらい』 山陽新聞社
- 横山良一 2002年 『「お四国さん」の快樂』 講談社
- Roy A. Rappaport 1999 *Ritual and Religion in the Making of Humanity* Cambridge University Press